

松谷基和著

『民族を超える教会——植
民地朝鮮におけるキリスト教とナ
ショナリズム——』

明石書店 2020年 322ページ

あおのまさあき
青野 正明

I はじめに

韓国の民族主義は絶対的な価値をもって、さまざまな分野で自明の前提となる存在として君臨している。たとえば歴史研究においても、それが前提となる韓国の民族主義史観は、研究者の間で相対化される前に絶対的な方法論として成立していた。これに対して、評者はそのような民族主義が世界史の普遍性のなかで相対化され、再構築されるべきだと考えている。そうならば、韓国の民族主義を相対化するためには、植民地期に芽生えた近代的な民族主義をまず分析する必要がある。評者はそれを植民地期の新宗教団体を対象にして、終末思想が民族主義の受け皿として用いられたことを論じた。それは植民地期の民族主義を相対化する試みであり、独立運動を恐れる朝鮮総督府が危険視して弾圧した「民族宗教」としての評価を打ち出す著書も出版した〔青野 2018〕。そして、その出版から2年後に、朝鮮のキリスト教と民族主義が結びついて理解される通説を批判した本書に出会う。

著者は、学部生時代の韓国留学や博士課程での米国留学の経験により、「朝鮮が非キリスト教国日本に植民地支配されたことを強調し、それに対する反発や抵抗として民族主義的なクリスチャンや教会が誕生したとする既存の通説」(14ページ)に疑問をもち、通説を検証する研究を進めていったという。そして、2012年にハーバード大学東アジア研究大学院に博士論文「Church over Nation」(民族を超える教会)を提出し、その博論の日本語訳に若干の修

正を加えて刊行したのが本書である。

したがって、朝鮮の民族主義をキリスト教の側面から相対化するという視点は、評者が抱いてきた問題意識と共通している。そのため、評者は本書を読み進めることで、疑問をもちながらもとらえられなかった朝鮮教会像が、まるでジグソーパズルの抜けたピースが埋まっていくように、少しずつはっきりとみえてきた。そして、その知的刺激に触発され、いくつか論点を考えたので、それらを整理して今後の課題として最後に提示することにする。その課題が、植民地期のキリスト教研究をさらに拡大・深化させるきっかけになれば幸いである。

II 本書の概要

本書の概要を書くにあたり、第1章以降は序論に書かれた要約を自分なりに編集して、各章の要点をまとめることにした。

序論「研究の目的」では、まず研究史において韓国語と英語による通説に沿った先行研究が確認され、つぎに同じ枠組みによる日本語の研究が示された。それを踏まえて、著者は通説の枠組みを批判して新たな見解を示す本書の意義を述べている。

第1章「朝鮮王朝とカトリック宣教師」では、18世紀に朝鮮に伝来し、地下教会として広がったカトリックの歴史が、帝国主義的な宣教政策により朝鮮政府や社会と激しい対立を引き起こした点に注目して描かれた。そして、これが後のプロテスタント宣教師にも改善されずに継承されたことも指摘されている。

第2章「プロテスタント宣教師と権力」では、前章のカトリック宣教師が用いた伝道方法が、治外法権を利用する米国のプロテスタント宣教師たちにも模倣されていく過程が明らかにされた。そのため、朝鮮王朝の抑圧的な支配から逃れようとする被抑圧者が改宗者の階層となり、宣教師の社会的な地位も圧倒的に高いものとする結果をもたらしたという。

第3章「ミッション支配下での教会形成」では、朝鮮教会内において西洋宣教師が有していたさまざまな特権の指摘を前提に、朝鮮人信徒が従属的な立場に置かれ、宣教師たちが支配権を維持していったことが論じられている。そして、このような両者の間のヒエラルキーの権力関係は、教会が朝鮮人信徒

の自律性や主体性を制限するような組織体制を生み出したとする。

第4章「ミッションスクールの運営方針」では、ミッションスクールが近代教育よりも伝道者を養成するための宗教教育に重点を置いたため、朝鮮人信徒は一般的に高等教育を受ける機会に恵まれず、社会的信望を得られなかったことが指摘された。そして、こうした宣教師による知的支配は、朝鮮の知識層の反発を招いたことも明らかにされた。

第5章「教会と政治」では、宣教師が「教会と政治の分離」を宣教政策上の基本原則に掲げて、朝鮮人信徒の政治関与を規制していた具体的な事例が示されている。こうした宣教師の姿勢は、日本の植民地支配（1910～1945年）が開始された後も変わることがなく、教会は民族主義に接近するどころか、逆に非愛国者の集団として批難されるほどであったという。

第6章「朝鮮人クリスチヤンの教会批判」では、従属的な立場に置かれた朝鮮人信徒が徐々に宣教師への抵抗運動を開始し、一部の信徒が宣教師の支配の及ばない独立した教会の形成を試みていったことが示された。そして、朝鮮人信徒の民族主義や独立志向は、必ずしも日本の植民地支配への反発から生じたものではなく、むしろ西洋宣教師との摩擦や衝突によって醸成された側面があることが指摘されている。

第7章「朝鮮人知識人の教会批判」では、民族主義運動が広まるなかで、知識層の朝鮮人は宣教師の朝鮮人信徒に対する知的支配を、朝鮮の文明開化や民族独立を達成するための実力養成を阻害する主要因とみなし、公然と批判を始めたことが明らかにされた。そして、彼らのなかには植民地支配者である日本の学校制度を評価し、自らの子弟に日本の公教育を受けさせる者もいた点が指摘されている。

第8章「朝鮮教会と三・一独立運動」では、朝鮮のキリスト教的民族主義が具現化した代表的な事例として知られる三・一独立運動（1919年）に対する再解釈が試みられている。実際には、「独立宣言書」に「民族代表」として署名した信徒の多くは、朝鮮教会が宣教師に従属的で脱政治的である姿勢に不満をもつ反抗者で、また教会組織を代表していなかったことが裁判記録等で裏付けられた。その後のデモ活動にも教会の組織的な参与はなく、北部地方が多

いという地域的な偏りがあったことも明らかにされた。

終章「1920年代以降の朝鮮教会とナショナリズム」では三・一独立運動後の朝鮮教会の動向が概観されている。引き続き宣教師の朝鮮教会支配が続いたため、朝鮮教会は民族主義運動に参加することが制限され、結果的に朝鮮教会と朝鮮ナショナリズムが一致することはなく、むしろ両者の距離は広がっていった。実態として朝鮮人信徒は、19世紀末から20世紀の前半を通じて、日本による「政治的帝国主義」と、ミッションによる「宗教的帝国主義」の間に置かれていたわけである。よって、朝鮮教会は民族主義一辺倒の組織に収斂していくことはなかったと結論づけられた。

Ⅲ 本書の貢献

本書の大きな特徴は、巻末の「参考文献」リストに掲載された「宣教師による英文資料」の量の多さからもわかるように、宣教師関連の資料をはじめとした一次資料に依拠している点にあるといえる。先行研究により定着してしまった通説を真正面から批判する見解を示すうえで、これらの一次資料が十分な説得力を生んでいる。この点を前述した本書の概要に沿って第1章から例示していくが、その前にまず序論での成果を指摘しておこう。

序論で整理された研究史は、韓国語、英語、日本語による先行研究について、それらが書かれた政治的・社会的背景と照合させることで、それぞれの限界を明確に示すことに成功している。そのため、朝鮮のキリスト教と民族主義を一致させる通説が生まれ、伝播し、継承されてきた過程が理解しやすい。

では、一次資料に依拠して生まれた成果に移ろう。第1章のカトリック宣教師についての導入部分の後、第2章から第5章にかけては、西洋宣教師と朝鮮人信徒との間に形成されたヒエラルキー的権力関係が論証されている。そして、この関係を軸に、宣教師に支配される教会の形成や、近代教育が受けられないミッションスクール、民族主義に接近できない朝鮮人信徒の姿が鮮明に浮き彫りにされた。

また、第6章から第8章にかけて、知識層の朝鮮人による教会批判や、三・一独立運動と教会組織との隔たりについて、著者は尹致昊の日記（英語の

原文) や、逮捕者の訊問書や証言という裁判記録など、貴重な一次資料に依拠して実証的に論証している。

以上のような成果にもとづいて、植民地期の朝鮮人の民族主義をキリスト教の側面から相対化し、新たなキリスト教評価を提示することが可能となった。この相対化と、朝鮮教会と民族主義は一致しないという新たなキリスト教評価の提示が、本書の大きな貢献といえるだろう。なお、三・一独立運動と韓国の「建国」を結び付ける韓国ナショナリズムを批判した小野 [2021] も併せ読むと、また別の角度から本書の貢献を見出せると思うので追記しておく。

IV 今後の課題

杞憂かもしれないが、本書のタイトルにある「超える」という表現だけをみて、朝鮮教会は民族を超えて普遍性を目指していた、と誤解する人がいるかもしれないと気になった。これは「民族よりも教会の利益優先 church over nation」(208 ページ) という説明を読むと、その意図がはっきり伝わるのであるが、これを序論にも書いておけばよかったと思う。

また、本書の成果が宣教師や知識人にかかわる事項に集中しているのに対して、庶民層の朝鮮人信徒に関しては資料の制約のためか不明な点が多い。確かに、西洋宣教師との間に形成されたヒエラルキー的権力関係は明らかになったが、そのことは庶民層に関して、宣教師に抑圧されながらも従順だったという信徒像を描くことになった。しかし、一部の庶民層の朝鮮人信徒は、宣教師支配から逸脱する内在的な要因を有していたのではないかというのが評者の最大の疑問点である。

そこで、資料の制約を補いながら庶民層の朝鮮人信徒について論じるために、つぎに4つの論点をあげて今後の課題として提示しよう。なお、朝鮮教会側の「自治」「自立」の論理を、三・一独立運動後に総督府当局と西洋宣教師が、それぞれ異なる目的で共有したことを問題提起した褻 [2021] は、評者とは別の課題を提供してくれるので追記しておく。

1. 終末思想が受け皿

一般論として宗教運動や宗教現象を理解するうえで

で、何何教という既成の宗教概念でのアプローチには限界がある。しかも庶民層の朝鮮人信徒を対象とするなら、キリスト教の土着化の観点が必要であり、キリスト教信仰が接ぎ木される土着の民間信仰の要素にまで視野を広げないといけなだろう。

新宗教(植民地期には非公認の「類似宗教」とされた)の場合、一般に日常においては祈福信仰という巫俗(シャーマニズム)の要素がみられ、政治的関与に動くような非日常においては終末思想の要素が大きく作用していた。つまり、三・一独立運動を通じて庶民層に芽生えた民族主義は、新宗教に内在している終末思想が受け皿になっていたということである [青野 2018]。

これを庶民層の朝鮮人信徒に当てはめるなら、宣教師支配の下で彼らは「神癒」などの祈福信仰としてキリスト教を受け入れることは認められたが(祈りの力で病気を癒す金益斗の「奇蹟」やリバイバル集会など)、終末思想の要素は抑えられ、それが作用する機会は遠ざけられていたといえる。

2. 天道教との類似点および連帯

ところが、三・一独立運動には庶民層の朝鮮人信徒も加わり、その逮捕者は北部地方に多かった(268~270 ページ)。つまり、一部ではあったが彼らも民族主義とは無縁ではなかったということである。これを考察するためには、キリスト教と天道教の神観が類似しているうえに、1905年に創立された天道教が、東学の北接教団を再編成してキリスト教をモデルに近代化路線を進めた結果、西北地方・平安道地域で両者の間に競合と連帯が顕著となったことに注目する必要がある。この実態を背景に、三・一独立運動においてキリスト教は、同地域で組織的に主導する天道教との間に連帯関係を生むことが可能となったのである [イ 2020]。

3. 「地上天国」的な民族主義の可能性

前述したキリスト教と天道教の間における競合と連帯が生まれた社会的な背景として、村落共同体が解体する過程で共同性が比較的弱い北部畑作地帯で、両者の新興勢力が同じような方法で村落自治の掌握を進めて地盤を固めていったことが推定できる [青野 2018]。

両者の終末思想を考えるうえで、北部畑作地帯の

村落において、旧支配秩序から脱して新たなキリスト教の自治村や、天道教の自治村を目指した可能性の検証は重要な研究課題となる。たとえば、1920年代になって北部畑作地帯で展開された天道教の農民運動は、村内の新興勢力が共同耕作を通じて自治村を目指していたことが実証されている〔青野2018〕。

前述したキリスト教と天道教の連帯にかかわる資料をみると、1910年代までの時期においても、天道教は平安道などでキリスト教をモデルにして自分たちの力で教会堂を建て、それが提供してくれる初歩的な教育（ハングルと教義の学び）と集会場所という要素により、村落内に地盤を築いていたことを確認できる。このように旧支配秩序から脱して、村落に実現する新たな秩序が彼らの「地上天国」であったといえる。

以上からわかるように、そもそも天道教は「地上天国」（天道教の用語）を志向したが、キリスト教はむしろ来世天国を志向する傾向にあった。しかしながら、この地域のキリスト教に関しては、農民である庶民層の朝鮮人信徒が「地上天国」の影響を受けやすい環境にあったわけである。そのため三・一独立運動は、それに加わった庶民層の朝鮮人信徒に終末思想が作用する機会となり、その終末思想が受け皿となり、日本の支配から脱して独立することを「地上天国」とみなす民族主義が芽生えた可能性を指摘することができる。

なお、三・一独立運動後における「地上天国」的な民族主義は、天道教をはじめとする「民族宗教」に継承されている。そのため、1935年の国体明徴声明を受けて取締りを強化する朝鮮総督府が最も危険視したのは、「民族宗教」（「類似宗教」とされた）における「地上天国」的な民族主義であった〔青野2018〕。

4. 三・一独立運動後の民族主義を考察する視点

三・一独立運動に西洋宣教師が関与していたと誤解した朝鮮総督府は、表向きは宣教師たちからの陳情を受けるかたちで、1920年に布教規則（1915年制定）を改正し、朝鮮人信徒が宣教師から分離して独立した教派を作ることが可能にしたといえる（近く論考する予定）。

ここで重要な点は三・一独立運動後に、再臨信仰と土着の終末思想が融合した教義や、巫俗の要素が濃い神秘主義的な信仰をもち、いわゆる「異端」とされるキリスト教系の新宗教団体が発生することである。そして、これらの団体にも、公認宗教であるキリスト教の独立した教派として朝鮮総督府に公認される道が開かれた点を看過してはならない。

その系統は公認されたキリスト教として植民地期を生き延び、解放・分断後にはそこから統一教会が派生する。統一教会では教祖が再臨主となる「地上天国」が唱えられていた。つまり、キリスト教に芽生えたであろう「地上天国」的な民族主義を、「正統」キリスト教が吸収・継承することができず、皮肉なことにキリスト教系の新宗教団体が、大きく変形して取り込んだと理解できるのである。

三・一独立運動後における民族主義を考察するためには、こうしたキリスト教の状況と、前述した「民族宗教」が「地上天国」的な民族主義を継承していく状況とを対比する視点が必要であろう。

文献リスト

〈日本語文献〉

- 青野正明 2018.『植民地朝鮮の民族宗教——国家神道体制下の「類似宗教」論——』法蔵館。
 裴貴得 2021.「1920年代初期の朝鮮総督府とキリスト教をめぐる諸相——『朝鮮の統治と基督教』を題材に——」『アジア・キリスト教・多元性』19(2)(3月) 47-75.
 小野容照 2021.『韓国「建国」の起源を探る——三・一独立運動とナショナリズムの変遷——』慶應義塾大学出版会。

〈韓国語文献〉

- イ・ヨンホ [이영호] 2020.『東学・天道教とキリスト教の葛藤と連帯, 1893～1919』[동학·천도교와 기독교의 갈등과 연대, 1893～1919] 靑い歴史 [푸른역사].

(桃山学院大学教授)